部署の垣根を越えて，麻酔を受ける子どもと家族へのベストプラクティスを考える

手術に大小はありますが，麻酔には大小がありません。子どもが安全かつ安楽に手術を完遂するためには，眠らせる（意識消失），痛みをとる（鎮痛），動きを止める（不動化）ために全身麻酔が一般的に行われます。また，MRI 撮影や放射線照射など不動化が要求される検査・処置では，動かないでいることが難しい発達段階や状況にある子どもたちに対して，深い鎮静や全身麻酔が必要になることも多くあります。さらに，針穿刺の痛みを伴う検査・処置では，局所麻酔によって痛みを緩和するといったことも，近年行われるようになってきました。このように，小児看護領域では成人領域に比べ麻酔や鎮静に触れる機会が実に多く，命に直結する処置でもある麻酔や鎮静の利益とリスク，安全管理について理解することはとても重要です。また，麻酔や鎮静はそれ自体が子どもや家族に不安や恐怖心を生じさせるものであったり，逆に不安や恐怖を緩和するために麻酔や鎮静を使用したりと，子どもと家族の心理社会的側面のアセスメントや支援も大切です。

術前評価やプレパレーション，術後管理など，子どものもつ疾患や病態理解に加え，個々の成長・発達に合わせた対応や保護者，家族へのケアなどは，まさに小児看護の特徴であり醍醐味ともいえます。周術期・周麻酔期を通しては，子どもと家族にかかわる多くの部署のさまざまな専門職が協働して治療・ケアを行うことが，良好なアウトカム（手術や検査・処置を受ける子どもと家族の最善の利益）のための鍵になってきます。質の高いケアや治療を維持・継続するには小児科と手術室・麻酔科の双方からの専門的視点を知り，共通言語を学び，それを今後の看護や治療に生かしていくことが理想です。

本特集では，小児看護と周麻酔期看護の専門性を生かし，麻酔下で手術や検査を受ける子どもとその家族へのケアの質向上にむけ，部署や職種を越えた小児病棟 / 外来と手術室・検査室の協働によるケアの実現を目指すことを意図しています。そして，麻酔や鎮静を受けるさまざまな発達段階にある子どもとその家族への看護の力をさらに伸ばすために，小児科からは小児科医や小児看護専門看護師，チャイルド・ライフ・スペシャリスト，手術室や麻酔科からは小児麻酔科医や周麻酔期看護師，手術看護認定看護師など，各領域の専門家による執筆を企画しました。

麻酔を受ける子どもたちが，安心して，安全に手術や検査・処置に臨むことができるように，読者の皆様からの切れ目のない看護の提供の一助となることを切に願っております。

聖路加国際病院麻酔科・周術期センター／
周麻酔期看護師
吉田　奏 Yoshida Susumu

埼玉県立大学保健医療福祉学部看護学科／
小児看護専門看護師
平田美佳 Hirata Mika